

新潟中越大地震 ボランティアレポート



山口大学提供の住宅200万円?代スタッフ用



- 、地震の概要
- 、活動レポート
- 、各種活動について
- 、活動にあたっての留意点
- 、今後の活動について

報告日 平成16年12月24日
報告者 県防災ボランティア
K-37号 竹花 充章
e-mail DZP03757@nifty.ne.jp

。地震の概要

平成16年10月23日午後5時58分頃新潟県中越地方を中心に東北・北陸・関東にかけて広い範囲で強い地震が発生、川口町では震度7、小千谷市では震度6強を観測しました。続いて、同6時12分ごろ震度6強、34分にも震度6強の強い地震が発生した。23日には震度4以上の余震を20回観測した。建物崩壊などで38人が11月6日までに亡くなり、2612人が怪我をした。被災者は一時10万人を越え、震災1週間目で7万6600人が避難所、車の中で避難生活を送った。

新幹線は、時速200キロで脱線、奇跡的にけが人はなかった。道路や鉄道が各地で寸断され、北陸、関越自動車道は数カ所で通行止めになり、道路・鉄道とも東京方面への大動脈がストップした。

中山間地の集落では孤立し、山古志では自衛隊によりヘリコプターで空から救出が行われた。電気・ガス・水道のライフラインも広範囲に止まり復旧は難航しました。川口町の田麦山では、12月9日現在でもボランティアにより飲料水の配達が行われていました。(写真参照)

今回の地震の特徴は1回目より2回目、3回目と体感的には揺れがだんだん強くなり、最初の1撃以降は収束に向かう定説は覆されました。私が塩谷地区で活動時に聞いた、幼いお子さんの被災も2回目の地震で入浴中であったとのこと。また、私が6日から現地に入ってボランティア活動期間中でも震度5位の地震は何度も経験しました。実際問題もっと早く現地に入ることはできたものの余震が多数発生している状況では2次災害を防ぐ観点からも難しい状況であった。

田麦山の給水活動



12月9日、避難本部前にて

新潟大学 高濱信行教授の調査では、

1. 深さ.0キロと浅いところで7・6強の強い地震が立て続けに3回、余震も多く、長期間余震予報が出されていた。
2. 非常に強く振動したゾーンあるいは一画の地が散在する傾向がある。
3. 重力以上の上下動の地震にも関わらず、阪神より被害が少なかったのは耐雪建築構造が幸いした。

小千谷市小栗山



4．新潟地域は、日本有数の地震活動地域・地滑り地帯である。

5．自然現象を止めることは出来ないが、被害を軽減する方法は必ずあるはずである。詳細な調査をもとに、我々の社会が自然に対して何処に弱点を持っていたかを明らかにすることが大切である。

。活動リポート

新潟中越大地震は、長期に渡ってボランティアが必要な活動です、時期によって活動内容が変化しており、これからは、春まで雪に対する活動が中心になります。その辺を念頭に記載しました。春になって雪がなくなれば、また活動内容が変わり、長くボランティア活動は必要になると思います。

11月8日は、看護師さん移送

12時23分、大阪から来る看護師の小坂さんを鶴ヶ島駅で待つ、数分後、こちらの車が分かたらしく”今日は・・・”と言って近寄ってくる若い女性が現れる。期待とおりの”看護されたい系”の方でした。早々、鶴ヶ島ICから目指すは、新潟は川口町の要介護の老人ホーム・・・

高速をいろいろと自己紹介を兼ねながら快調に走る、当初軽い気持ちでボランティア仲間からの依頼を受けたが、報道で山奥の要介護の老人センターで看護師さんの手がたりなくてこまっているとの報道を聞いてから、ことの重大性を認識。酒は控え、パソコンも控え、栄養剤をのみ・・・体調管理につとめた。かくして、私のボランティア活動は鶴ヶ島から始まりました。

小出をすぎると道路の破損が大きく、まだ、簡易修理の段階、昨日一般車の通行が解除されたばかり、路面が綺麗なところは、ドスンと落ちるので速度は50キロがいいところ。越後川口の料金所を出ると、先行の埼玉レスキュー隊員の神原さんがバイクで待機しており誘導を受ける。通行止めの地点を突破！したところ、道路が3分の1位、雄大な信濃川に落ちている。落ちたら30Mは落下といったところか。この地震はバイク隊が大活躍、陥没した道路をしらべ4輪の走行を誘導してくれる、神原さんの優秀な誘導のおかげで行き止まることなく看護師さんを移送できた。なにせ車がやや大きいのでバック・Uターンは苦手！できればしたくない。

9日・10日は、本番の現地ボランティア開始？

彼女を無事送り届け、川口町のボランティアセンターに顔をだしたのは、8日の18時位、余り人もいなく閑散としている。残っている方にインタビュー、「待ち時間が多くて仕事がない」とのこと、、、やっぱり、避難勧告が出ている状態では難しいことを再度認識。

結局、ボラセンでの求ボランティアをあきらめ、資材ベースにて移動のお風呂造り等の手伝いをしながら近隣の状況を把握した。小千谷でのスーパーではALC外壁の落下で店舗の営業は出来ず、駐車場でテント販売していた。

その他では、MTBで川口町内の被害状況の調査、この調査で資材ベースで使用する飲料水の確保先を発見、町内の消火栓が水道水の供給先になっている。

10日の0時ごろ自宅に帰る。



外壁が落下、テントで営業の店舗

11月21日から24日にかけて

21日は移動日

こんどこそゆっくり閑越を移動、途中昼寝をして18時ごろ川口町に着く、

資材ベースの無線機が不調とのことなので、自宅から固定用に電源とともにキット化したモバイル無線機を今回移送し、設置した。これなら、小千谷まで楽に交信できる。



消火栓から水道水を供給

22日は、川口ボラセンへ

川口町のボラセンに7時到着、なにせ早く着いたので、土手に楽に車を置けた。ここは、ボランティアのキャンプ場にもなっている。

今月の初旬に来たときにくらべ、人はやや少ない。避難勧告が解除になったので、家の片づけが多いように見える。むしろ、看護師さんやバイク隊・パソコン屋等の専門職の要望が多いのと、期間は4日とか5日以上ニーズがやはり多い。

8時から始まった募集に、さっそく手を上げ(力仕事だとのこと)応募した。

家の解体は重機で行うが、カワラだけは、手作業、業者の方が壊した家の屋根から10人位のボランティアで一列になって、カワラを一カ所にまとめる。

業者の方から、まだ、次の家も沢山あり、手伝ってもらって大変助かると感謝の言葉をもらう。瓦の撤去の合間、思いでの品を回収する作業も忘れてはならない、業者では出来ない作業でまさにボランティアの仕事。午後16時ボラセンに戻り報告。



瓦を1列になって屋根から撤去



山積みになった瓦、指定日に搬出



回収作業

23日、浦柄避難解除の朝

宿泊していた、資材ベースが急にあわただしく動く・・・水害現場に行くとのこと、即、財団から借り受けの2トトラックの運転手を申し出て、ゲットする。

小千谷のボラセン開設前の8時に到着し、本日、ボラセンのリーダーとして現地、浦柄に入る寺島さんと打ち合わせ、2トトラック2台、軽トラ1台、ハイエース1台、バス1台でキャラバンを組み、アマ無線で交信しながら現地に向かう、一般ボランティアは、ボラセン開始前から集まっている方を出来る限りかき集めた。

浦柄は、あの母子が車ごと被害にあった山の東側、そこを流れる朝日川が崩落によってせき止められ、自然ダム化によって地震と水害のダブルパンチを受けた特異な地区です。我々資材ベースチームは先攻して入り、資材置き場を設営してバスを受け入れた。手際良く、寺島さんが班分けし、財団の黒澤さんが器材の使い方、土嚢の積み方などを50名ほどのボランティアに説明する。1時間程あとも、さらにバスが到着、当日は合計100名ほどのボランティアが浦柄の各家庭から、敷地から、ヘドロを道路側に山積みする。自衛隊は道路のヘドロをとり、パワーショベルでダンプに土嚢を積んで、山古志方面へ運んで行く。自衛隊の現場指揮官からは、各家庭の細かいところまで手がまわらないのでボランティアがやってくれて助かるとのこと。

今回の作業でなんとか、1階部分の泥は出せても、道路面から下の(家の下は半地下部屋で除雪道具、石油タンク等の置き場にしている)部分は、現状ではとても手を出す余裕がない。たぶん、来年の雪解けになってしまい、息の長いボランティア活動になるかもしれない。

24日、浦柄へ再度・・・出勤後、帰宅する。

この日も、浦柄に入る。前日と同じ活動をするが、2時過ぎに雨が振り出し3時には大雨になった、朝は快晴だったのに、この地区ではなんでも普通とのこと。天気予報は当てにならない地域だ。浦柄を引き上げたあと、ボラセンで活動証明をもらい、小千谷市役所で災害派遣等従事車両証明の発行を受けて、帰宅する。



庭先からヘドロ撤去



道路際に積み



ベースにて保管の機材を投入

1 2月6日から9日の活動

1 2月6日、鶴ヶ島を出発

17時近くに、中越センター資材ベースに到着。

早々、中越地震災害ボランティア支援センター資材ベース（ボランティアが使用する資材・車を提供）を運営している日本財団の黒澤氏に挨拶する。

1 2月7日（火）塩谷へ

資材ベースからハイエースを借りて、計5人で71号線を北上、峠の工事で1車線通行のトンネルを抜けると塩谷地区の集落が山の中に見えてきた。まさに、落人の集落だ。なにもなければ、静かな山村といったところだが今回の地震で子供が3人も犠牲になった悲しい知らせも聞いている。

現地にて引っ越し依頼の屋内をみて9日の引っ越しの荷物概要を把握する。

ここで、川口のボラセンからきているグループと落ち合う、前回来た時に共に活動した同士と再会の握手をしてニーズ調査と共に共同して活動に入る。

昼ごろベースにもどり、ハンマーなどの道具を用意していると、中越元気村のメンバーが2トンパネルトラックを借りに来たので、引き渡しの対応を代行する。

1 2月8日（水）小栗山へ

当日は朝から忙しい、9時に小千谷のボラセンにて小栗山に入るボランティアと合流するからだ。起床後、水害セットの長靴にゴアの河童などを着こみ簡単に食事をして昨日と同じメンバーにてハイエースに乗り込む。

8時30分に小千谷のボラセン駐車場に到着、一般ボランティアが集まっている。一頃の野外テントはもうなく、車庫の中にボラセンの受付がそっくり収まっていて、事務所は相変わらずセンターの中にある。今回行くところは、危険地域なのでグループで行動出来るチームに限って入れているとのこと。ここで3人のボランティアと合流、ボラセン会長が通行許可証を既に用意してくれていた。

小千谷でハイエースに全員で乗り込み、浦柄を通りさらに奥へ、検問所を抜けて豪快に、山が崩れている箇所を通過する。作業現地の小栗山は、浦柄の上流、あと2キロで山古志に至るところ、地震と水害のダブルパンチの中越地震でも被害の大きい地域だ。さらに奥に入るともっと大変な光景が見受けられる。

ここでは、ニーズ表の屋根のブルーシートの張り替えの調査と材木店の散在した材木の

後片付けがある。この程度だと10人では、時間が余ってしまうのでメンバーの19才の彼が、飛び回ってニーズ調査、簡易砂防の仕事を見つけてきた。(写真参照)

ここは、危険地域のため午後3時までにはボランティアは退去しなくてはならない。順調に作業が進み午後2時には業務が終わったが材木店のオーナーから、新たな依頼が出た。これが大変な依頼!!、まさにレスキュー・・・谷底の川に落ちた工具小屋に大切な工具が入っているとのこと、、いってみると大変(写真参照)。

もはや、ボランティアの範囲外、ボラセンに言ってもたぶん活動は却下だろう。

メンバーで協議、ともかく雨が降って増水している時は危険。

あとは、訓練を積んだ人、たとえば消防団、大学のワンゲル部など、でないは無理。それで結局、持ち帰り検討にして退却とした。

17時小千谷のボラセンにもどり、事務局に報告後隣接する市の体育館の駐車場に、自衛隊のお風呂があるので一風呂浴びて、川口の資材ベースに帰り屋内ゲートボール場内でみんなで食事後、屋内に設置したテントにて就寝した。

12月9日(木)町内活動と帰宅

9日は、塩谷での引っ越しを手伝いに行くつもりでいたが、・・・週末の50名から100名の学生が入る計画が進行してきたので急遽そちらの手伝いに入ることになった。小千谷ボラセンによれば、通常このような大型の団体は断っているとのこと。しかし今回は、ボランティア関係者の紹介で、資材ベースが受け入れの業務を実施することでボラセンも浦柄の残った土嚢片付けに対応することで同意した。結局、この関係の調整作業で1日が終わり帰宅の時刻になった。

新潟はもうすぐ雪の季節になる、資材ベースに車を10数台提供している日本財団も雪で動けなくなる前に各ボラセン等に貸与している車を回収して春まで退去することになった。(退去日は12月20日)

夕方ベースを出て、災害派遣従事車両証明書を鶴ヶ島インターにて提示し22時30分帰宅した。



峠から・・・煙の出ている所が塩谷



小栗山、川を埋めた山崩れ

小栗山で小屋から道具出して!

1 2月21日から23日

21日は移動日

川口町、小千谷のボラセン回る、小千谷のボラセンは終了して、ボランティアの業務が社会福祉協議会に以降していた。川口町のボラセンは、なんとか稼働といったところであつたが時間の問題だろう。

22日は小千谷社会福祉協議会から

ボランティア仲間からの情報から、那須から来ている桑原氏が小千谷の浦柄でチームを作って活動しているとのことなので早々連絡、再度の桑原氏のグループでの活動入りとなり9時小千谷のボラセンにて落ち合う。待ち合わせ地点に向かうにあたって、昨日からいよいよ降り始めていた雪によって車中泊の道の駅は真っ白、かなり強い降雪で大渋滞の市内であつた。

そうそう現地にチームで入り、後続のJR労組の受け入れ準備に入るが、作業開始直前に突然サイレンがなる。

地元の方の話では、上の山古志の自然ダム決壊のサイレンとので、JR労組はバスの中で約1時間待機その後開始となるが、雪も多く開始時間も遅れ結局処分場まで2往復で終わる。

次の日もJR労組の協力を得て活動、昼前後には、またかなり雪もあり結局、トラック5台1往復で終了となつてしまった。

24日のクリスマスイブになんとか完了し、ようやく2004年活動は、浦柄の廃材撤去の完了で終わりになります。

あとは、春の山古志での活動を残し、・・・また、ボランティア活動は続くことになります。

。各種活動について

中越センター資材ベース

川口町の屋内ゲートボール場にある資材ベースは、中越地震災害ボランティア支援センターを頂点に、長岡・小千谷・川口の各ボランティアセンターを構成しその中にこの資材ベースがある。

ここの資材ベースは、各ボランティアセンターと密接な連携をとり、豊岡で使用した水害の道具（スコップ等）を保管している。そのほか、日本財団提供の軽自動車のトラック10台、2トンのパネルトラック2台、ハイエース2台、その他各地から借り受けた車を保持して各ボランティアセンターに貸与していて、ちなみに川口には5台貸与し、その他借りにくるボランティアにも貸与している。一例をあげれば、「中越元気村」は、小千谷で仮設住宅にテレビ100台を配達する目的でここから、2トンのパネルトラックを貸与してもらって活動している。借りるには活動目的をちゃんと述べれば良い！その他では、浦柄での水害復旧活動にはここから、スコップ・ネコ・発電機等を現地へ運搬搬入している。

また、ここには川口ボランティアセンターを中心として活動しているボランティアが数組活動している。



道路に廃材の山

一番大きいグループは、オール栃木・つねに交替で10人前後で行動していて、継続的活動としては、最も地震の強かった田麦山にてお風呂の運営を長期に渡って実施している。五右衛門風呂だ！このグループは、ともかく活発に行動していて、資材ベースの方で、応援が必要な時に依頼すると何人か応援がもらえるありがたい存在。ベースの運営にも(生活用水の確保等)積極的に関わってもらっている。



バイク隊

今回の地震は広範囲にわたり、都市部から中山間地までに及び、道路が多大な被害を受け孤立する集落が発生した、この中で破損した道路を通行出来るバイクの機動性が災害救難活動に大きく貢献した。その主な貢献内容を上げると。

1、一般的な業務

- ・ボラセン発行の新聞を避難所と希望のあった個人宅へ配達し道路状況の把握をする。

2、現場で活動班からの依頼(バイクに適した業務)

- ・生活小物を各家庭に配達
- ・ボランティアの車両を通行可能な道路で誘導する。
- ・災害対策本部から各避難所へ緊急品等の運搬。

3、特徴的な業務

- ・バイクは、「鉄の馬」、馬だからちょっとした通り道があれば何処でも入っていける行動力がある。また、常に外気にさらされて乗車しているわけで、人との接触が容易で情報収集に優位な道具である。



待機中のバイク隊

専門職に従事する人

今回特に感じたのは、専門的技術を持った人は大きな力を発揮する、今回移送した看護師さんはもとより、やはり、家が壊れているわけで、建築関係者特に大工さんの力は大きいと感じた。

必須の装備

ボラセンと各地区に配置した支所及び、現地で活動するボランティアの連絡に携帯電話、また、アマチュア無線等の通信機は必須のアイテムであると感じたが、携帯でボラセンと現地支所との連絡が多くあり、これは個人負担になってしまうのでこの辺の対策が感じられた。

また、現地にいると情報不足になるので仲間から携帯メールでの情報の提供は最も有効なツールであると実感した。

。現地活動するに当たっての留意点

安全の確保

地震の場合は危険が多いので、現地入りの際には慎重な行動が必要。自分の行動がボランティアの評価を下げる事が無いように心がけ、準備をしっかり（地図調査等）行って活動する。

活動する場合には、ホームページでボランティアを受け入れているかどうか確認し現地で、各ボランティアセンターにて登録してから活動する。「ボラセン何処ですか？」と資料ベースに来た方がいます。このような方は、いい加減に考えているので？来ない事が良い活動になります。

行方不明になることがないようにグループ行動、報告は必ずボラセンに行く。

携帯電話は要持参品。

地震後の高速の通行は、路面に上下の段差があることがあり、速度は要注意、亀裂・段差でのタイヤのバーストに注意する。

早朝、深夜の長距離移動の場合、相当に疲労しますし、地震の初期段階には停電地域等もあり信号も停止、また、路面の状態も悪いので深夜（暗いとき）の移動はかなり危険です。

活動で受ける疲労への心構え

慣れない環境での仕事、休憩を適当にしてしまって、動き回ってしまう状況が予想されます。仕事の内容によっては、休憩はこまめにとること。

寒さの中で、テント・体育館生活等での不便な生活になりますので、想像するよりかなり疲労します。特に長期で活動する場合、仕事内容によっては毎日・目一杯活動をせず、自分の体力と相談の上、半日でやめておく事も考えに入れる。現地で倒れるような事があると、様々な人に迷惑や心配をかける事になります。

帰宅予定日には帰路道中長いので早めに切り上げて、なるべく明るいうちに帰宅できるようなスケジュールで余裕を持って移動する。

体調管理、風邪、感染症予防

風邪をひいていたり、寝不足の状態だと判断力が鈍ります。風邪薬を服用したときには車両の運転は控える。また、咳やくしゃみが出ている人は、被災者の方にはもちろんのこと仲間に迷惑をかけないようにマスクの着用をする。実際問題、現地で仲間のボランティアを病院につれて行ったこともあり、現地で新たな負担を発生させないこと。

特に食事前のうがい、手洗いは機会をみつけて行うようにする。

参考装備（衛生用品）

- ・ウエットティッシュ
- ・石鹸
- ・アルコール性手指消毒薬　水がない状態の時に応急的に利用する。
- ・うがい薬
- ・使い捨て紙マスク
- ・常備薬は現地では手に入りにくい。（風邪薬、解熱鎮痛剤、下痢止め、胃薬、栄養剤）

活動に際しての注意点（心構え）

- ・逆ボラされないよう、「自己完結型」の装備・スケジュールで現地入りする。状況は刻々変化しています。次の豪雨が迫っていたり、余震があったり、晴れていても地盤が緩んでいたりと、避難指示が出されている場合もあります。
- ・大切な事は自己完結！現地に、仲間に迷惑を掛けない！
- ・要請(指示)待ちにならない事。
- ・明るさが大事！現地は心身ともに暗い。皆さんの笑顔と元気が現地を被災者を元気にする！
- ・被災の時は情報錯綜・混乱は当たり前、理想的な行動をとるのは困難。
- ・「やってあげる」という意識は持たないように心がけること。
- ・自己実現、自己満足を求めないこと。
- ・受け手側の自尊心あるいは尊厳を傷つけないこと。
- ・もし自分が被災したらと考えて、しっかり想像を巡らせて行動する事。

持参するもの活動の際の準備品（予め各自ご用意下さい）

飲料水、食料、寝袋・マット、医薬品（常備携行品）

あたたかい服装（着替えは多めに）軍手・皮手袋、マスク、合羽、健康保険証のコピー、小さいノート及び筆記用具、デジカメ、携帯ラジオ、ウエストバッグ、リックサック、笛等、携帯電話、ヘルメット、水筒、ヘッドライト、地図、タオル、サングラス、カッター、堅牢な靴（安全靴が良い）、十徳等の生活用品。

。今後の活動

12月22日雪が降り始めた、仮設住宅への引っ越しが降雪前になんとか完了し当面の危機は脱したが降雪により新たなボランティア活動が発生、新潟県災害救援ボランティア本部のホームページによると仮設住宅の雪囲い作業や降雪時の補助作業の為に要員を求めて、「スコップ2005 救援除雪ボランティア募集」1（2月13日～24日の期間）を掲示している。また、春になれば山古志の復旧活動が本格化すると思います。

最後に、各ボラセンにて長期に渡って活動する若いスタッフの方の礼儀の良さ、業務の責任感等には感服しましたが、各ボランティアセンター活動が収束に向かう時期にいたっても帰宅しない方がいます。そのまま、職場に入っても早い時期に戦力化できる人材であると思いますが、今日の社会的現象と言うだけで片づけるのは残念です。

以上

